

まだ選者を務めさせていただいてから数回ではありますが、今回は今まで以上に印象的で美しい作品がたくさんありました。

季節がくっきりとする時期は、言葉の輪郭も心のそれも鮮やかになるような気がいたします。最近では温暖化の影響で曖昧になりつつありますが、四季がある喜びを、春に、夏に、秋に、冬になる度に感じます。みなさんはいかがでしょう。

換気のために開けただけだぞ、夏

そんなに急いで入ってくるな

はずた 富山県

→夏の空気は他の季節より質量があるように感じる。この作品は、季節を生き物のように扱っているところが面白い。窓を開けた瞬間の空気の感覚を斬新に描いた。また、コロナ禍であることを悲壮感を出さず軽やかに描いている。巧い作品。

紫陽花を亡子の脳と思うまで

長谷川柊香 宮城県

→紫陽花の密集度はちょっと怖い。“がく”(私たちが花だと思っているところ)の奥を覗いても“がく”があるし、遠くから見ても一朵の境目が分からない。美しさの内側に何が集まっているのだろうか。「亡子の脳と思うまで(見続ける)」作中主体の強迫観念性とその怖さと混ざり合う。いずれ朽ちる花に亡子を重ね、また子を喪う。

将来の夢はあめんぼ しりたくて

しったことなどひとつもないよ

白野 新潟県

→幼い頃は願えば何でもできるのだと信じていた。空も飛べ、容姿も思う通りになり、自動的に大金持ちにもなれるのだと。しかし大人になり全くそんなことはないのだと知ってゆく。結句の平仮名での表記に、心の中にまだいる「あめんぼ」になりたかった儂い存在を感じさせる。

教科書に折り目をつける瞬間と

まっさらな雪 蹴散らす瞬間

うずたろう 埼玉県

→美しい場所を一番初めに汚す躊躇いと、汚したあとの熱狂はセットである。この作品の季節はおそらく春。配られた新しい教科書に授業で折り目をつけた瞬間、冬にまっさらな雪を蹴散らしたときの快感を思い出したのだろう。「教科書“を”折る」「雪 蹴散らす」と、助詞で現実と記憶の区別、理性が快感へ移るのを描く。

ノートを破り、
ノートを破り、
ノートを破り、
光の春に飛び散っていく。

鍋島小骨 北海道

→詩の良いところの中のひとつに、一心不乱であることを果てしなく自由に書けることがあると思う。リフレインによってどんどん手元にクローズアップされてゆく。春の光ではなく、光の春(光の季節)というより大きなものへ解き放たれる。細かく破られたノートは、何に生まれ変わるのだろうか。光の中へ溶けるように遠くへ飛び散っていく様を想像する。

半透明なものはみな宝石だと

いう

君の

のむ

麦茶

立花ばとん 東京都

→視覚的にも、言葉が雫のように配置された作品。「半透明なものはみな宝石」という君のなかの定義が良い意味で雑であり、この世には宝石が溢れているというきらきらした気持ちになる。そうか、世界はこんなに美しかったのかと気付かされる。作中主体にとっては君も(麦茶のコップにつけた君のくちびるも)きらきらした宝石なのだろう。

胸がいつまでも締め付けられて

レコードの針やペン先になる

ヒロミヤカザル 京都府

→胸(心や感情)が締め付けられるときキュッと抓られる感覚がある。作中主体はどのような経験をし、何を考えているのだろうか。そんなに心がほそくなるほど切ない想いとは。しかし長く切ない想いをした胸は、いつかは音楽を奏でたり詩を書けるようになっていたりするのだ。苦く切ない想いの果てにある甘やかさを作者は知っている。

くちびる

剥いたらいけないって

分かってるけど

早く羽化したくて

岡田 佳子 京都府

→爪を噛むのもかさぶたを剥がすのもささくれやくちびるを剥く行為も、実は自傷行為に含まれるらしい。私たちは幼少期からそういった身体の一部を剥くのはいけないことと教えられる。羽化という生命の再出発のような現象との取り合わせが良い。自分が押し込められている環境や身体、心からの開放を希求しているのが伝わる。

タクシーの

深夜料金の額から

プルメリアの散る

九月の道路

うずたろう 埼玉県

→状況の説明という面ではあまり成立しない作品であるが、景があまりに美しく取りあげた作品。瑞々しい九月の夜風と月光に淡く照らされるプルメリア(この場合、花色は白だと感じる)。作中主体は、深夜にタクシーに乗っているのか見送っているのか想像が膨らむ。後者ならば、愛しい人を見送っているのではないか。作中主体が見つめるほどプルメリアは散り、夜風を甘くしていくのだ。

月が透けてる。

殻を破れずしんでった

いきものたちで

いっばいだった

藤ほたる 神奈川県

→生々しい作品。月の薄青い表面は、なるほど確かに卵の薄皮のようでもある。生まれなかった命はどこへいくのかという問いは誰もが一度は考えたことがあるだろうが、作者は月の中にその命を見る。白くふやけた「いきものたち」がみっしりと詰まっているとすると恐ろしい。他にもよい作品が多くあった作者。